

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第487号 2022年10月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

フムージル（人間にする）ということ

西 勝巳

表題の「フムージル」とは、モンゴル語で「人間にする」という意味です。また、その言葉は「教育」という意味でも使われています。

モンゴルの遊牧民は、男の子・女の子を問わず三〜四歳にもなれば、みんな仕事を始めるそうです。男の子は、お父さんのあとについて草原に家畜を連れて行き、牧畜をすべて学びます。女の子は、お母さんに付いて、家の中のことを全部学びます。

モンゴルの子どもたちは、このようにしてお父さんやお母さんの姿をみながら、一人前になっていくという話を聞きました。

もちろん、モンゴルに学校が無いわけではありません。ただ、モンゴルの子どもたちは、親の背中をいつもみながら学んでいるとい

う事実に、私は心惹かれるものを感じるのです。日本のこれからの教育のあり方として忘れてはいけないことを・・・。

日本にも、かつては子どもが親の背中をみる雰囲気がありました。ところが、親も子どもも忙しくなりすぎたのか、親の子どもとのふれ合いのベクトルが、子どもに何をしようかということばかりに向いているのです。何をしてもらおうかという発想が生まれていないのです。

小学校高学年くらいになると、個室に閉じこもり、家族の団らんに加わらない子どもが増えてきます。友達とのSNSでつながっている時間が優先されます。おまけに、家事の手伝いもしません。自分の食べた食器さえ片付けしないで、さっさと個室へ戻っていくのです。親は「きつと勉強している

んだ」とか、「これで自立心も育つよ」と思い込んで安心している風潮さえ見られます。

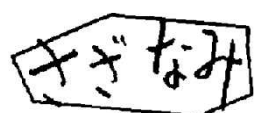
これは一種の、人の役に立つ喜びとか、家族の連帯感みたいなものが育つ場がなくなっている状況であるともいえるでしょう。個室を否定しているのではなく、家庭の中に子どもにとっての心の孤室をつくってしまったことが憂うべき昨今の家庭崩壊の予兆です。

最近、ミーイズムという言葉に出会いました。自分を中心に物事を考え、他のことに関心をもたない生き方、自己中心主義のことです。個人主義を通り越して利己主義に走っていく人間社会の反映かもしれません。教育の場でも、個性重視の負の側面です。日本人の多数が人の役に立つことに喜びを見出せないという薄ら寒い心の状態をつくりだしてしまっただけです。

人は人と関わり合って初めて自分が見えてくるという部分があると思います。ミーイズムからは、感性とか、クリエイティブな発想とか、人間の本当の純粋な愛というものは生まれにくいものです。心なんて教えられないと嘆く前に、大人が自分自身の感性を磨くことがフムージルに繋がるのだと信じてほしいのです。

大人が子どもに、本当の自分探しの旅の案内役として、自分が見える心を育てる教育の推進者たる立場になる重要性が、今後ますます叫ばれてくるでしょう。

(関西大学 初等部国語主任)

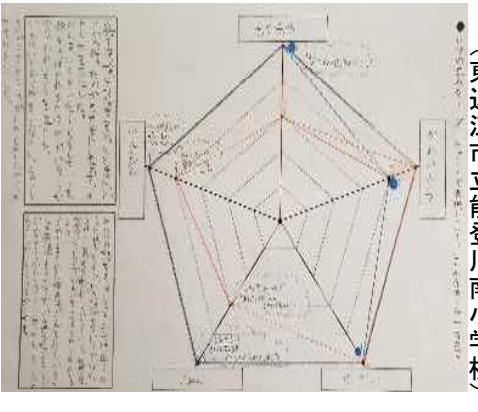
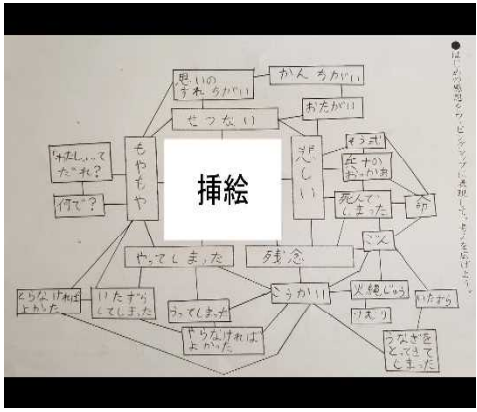


▼読売新聞（令和4年9月）に、「不登校へ配る学び」という見出しで次の記事が載っていた。「不登校で学校に行けない生徒や、教室に入れず別室で過ごす生徒が一人でも勉強できるように」と、東近江市の元中学校長、雁瀬徳彦さんが、2年がかりで歴史、地理、公民の自習プリント教材を手作りした▼プリントの内容は一日一ページの文章を読んだら、3問の記述問題を解答すればそれぞれ約70分で教科書の内容を一通り終えられるというもの。閉ざされた心を少しずつ開いてほしいとの願いを込めたと「この窓」の記事は紹介をしていた▼記事の中で印象に残ったのが雁瀬徳彦先生がこころがけたと言われる語りかけるような文体。「今日の気分はどうですか」に始まり、「この窓」を開けてくれてありがとう」と続く。歴史漫画を「めっちゃめっちゃわわかりやすいです」と薦めたり、「地理は旅行の計画を立てるよう勉強してみよう」と友人のように勉強法を助言する等▼最近、授業においてプリントが多くなったという印象を持つている。プリント作成時には、その時々々の願いがある。が、その気持ち、子供に伝わっているかどうか。プリントの横に、やる気を起こさせる言葉を添えたらどうだろうと思ひ、「この窓」っていいなと思う心が動き、再度、記事を読み返した。

(吉永幸司)

シンキングツールの活用した読みの交流 高木 富也

最近の個人研究の関心事として、シンキングツールの活用について、これまで物語の指導に関しては、全文掲示を活用したり、ジグソー学習などの協働学習を取り入れたり、様々な手法を自分なりに取り入れてきた。しかしながら、読みの解釈が高い児童の意見に引っ張られる、苦手の児童は発表できないままだった。目の前の児童は、何を考えているのだろうか？どのように物語を解釈しているのだろうか？これらの疑問を解決するために、シンキングツールに着目した。シンキングツール(思考ツール)について田村は、収集した情報を処理したり、再構成したりして関係や傾向を見出すための枠組みであり、抽象的で曖昧になりやすい「考える」ことが具体化され、可視化されることにより、全ての子どもに「考える」ことを実現するということを述べている。『田村学(2008)『深い学び』より』昨年度の4年生では、「こんぎつね」において、ウェブビングマップとリーダーチャートを用いて読みの流れを図った。ウェブビングマップによって自由に読みを拡散・関連付け、リーダーチャートによって読みの収束・視覚化・変容をねらった。これらのシンキングツールの活用によって自分の読みを視覚化するこ



手な児童にとっても、シンキングツールなら書くことができる、書けついでなくともシンキングツールの活用を予定している。どのよう

日記とお手紙 弓削 裕之

毎年、1年生と2年生が稲刈り・芋掘りに行っている。今年も、1・2・3年生の縦割りグループで活動をした。2年生は、1年生のお世話をがんばっていた。学習の振り返りとして、「いねかり・いもほり日記」を書いた。後日、現地でお世話になった先生方にお礼の手紙を渡すことになった。日記をそのまま渡ししようかと考えたが、相手を意識することと子どもたちの言葉が変わるかもしれないと思い、改めて「おれいのお手紙」を書く場を設けた。

Aさんの「芋掘り日記」 ぼくは、一ばんはじめに大きいおいもをほり出しました。そして、おいもをほって見たら、小さいおいもがいっぱい出てきました。そのあとも、スコップでおいもにきずがつかないようにしてほりました。

Aさんの「お礼のお手紙」 はんしんえんげい(阪神園芸)の先生へ おいもをそだててくださってありがとうございました。おかげで楽しくおいもをほれました。おいもは、ホクホクしておいしかったです。ありがとうございます。

日記には、お芋を掘っている時の様子が書かれている。手紙には、おうちでお芋を食べたことが、「ホクホク」というおいしそうな言葉で綴られている。きちんとお礼の手紙を意識して、「おかげで」という言葉を選んでいることが分かる。

Bさんの「芋掘り日記」 かんこうバスでもほりに行きました。5〜10こくらいほれました。小さいおいもが2〜4くらいで、中くらいのおいもが2、3こくらいで、大きいおいもが2、3こくらいでした。楽しかったです。

Bさんの「お礼のお手紙」 O先生、□先生、いねをそだてていただいたてありがとうございます。10月8日に、そだててくださったいねをだっこさせていただきます。またらい年もよろしくおねがいします。

お芋の大きさが心に残っていることが分かる日記だ。お手紙の方は稲刈りの話題で、脱穀の予定が綴られている。1年生は割り箸で脱穀をしたが、2年生は、千歯こきと足踏脱穀機を使う。どこか誇らしそうに伝えているのが微笑ましい。 「日記と同じ内容を手紙に書いてもいいですよ」と話したが、結局、みんな日記とは別のことを手紙に書いていた。日記の言葉とお礼の言葉は、違うようだ。

(京都女子大学附属小学校)

**学習者と学習対象が
つながる学び
少徳 信**

5年生では、漢字の成り立ちについて学習した。学習前に漢字学習のイメージについて聞いてみると、「難しい」「覚えるのが大変」「細かいところを覚えるのが苦手」など、「苦手・どちらかというと苦手」といった回答をした子がほとんどであった。子どもの回答を詳しく見てみると、とにかく「覚える」ことに抵抗感や苦手意識を持つていることがわかった。そこでこの単元では、漢字をただ「覚える文字」として考えず、先人がある事柄や意味を伝えるために開発した「意図が込められた文字」として捉えることで、漢字をより身近なものとして感じられるようにしようと考えた。

「そうそう、意外と自分たちと変わらんとところもあるしな」などと新しく得た漢字の感覚を話してくれた。単元の最後で設定した創作漢字コンテストでも、「僕は象形文字スタイルでいい」「新たな作り方でいくわ」など、かつて漢字を作ったであろう人々になりきって漢字に意図をこめつつ楽しんでる姿が多く見られた。

今回この単元を通して、「学習者と学習対象がにつながる」ことの楽しさを感じられたように思う。単に「漢字を覚えようとする」ことは子どもたちから漢字への一方通行の学びである。子どもたち自身も漢字に向かい、かつ漢字から子どもたちに伝えようとしていること（今回でいうと成り立ちの意図）についても受け取れる、いわば「学習者と学習対象がにつながる」学び方ができれば、より楽しく、より豊かな学びになると思った。

今まで多くの先生方に、筆者や作者の意図を読み解くことで自分の学びに生かすという学び方を教わってきた。私は読み物教材でのみ使うとばかり考えていた。しかし、今回のように作った相手ははっきり見えないかもしれないが、明らかにそこに作り手の意図があるものも存在している。ただ一方的に「こういうもの」として教えるのではなく、そこに込められた意図を読み解きながら国語を楽しむんでいきたいと思う。

(彦根市立河瀬小学校)

**「気持ち発問」からの
脱却を図る
谷口 映介**

文学における発問は、「気持ち」を直接問うことが多くみられる。人物の気持ちを読み取ることは国語科の学習において大切である。しかし、直接問うことが、本当に考えたい「問い」になり得ているのかは再考が必要であろう。

◎気持ちを直接問わない発問
「ちいちゃんのかげおくり」――そもそも、「気持ち」とは、どこから読み取れるのだろうか。いくつか挙げてみる。

○人物の会話・行動・表情(また、場面の移り変わりにおけるこれらの変容) ○情景描写等の表現

気持ちを読み取る場合、文章のどこに着目すればよいのか。どうすることが気持ちを読み取ることなのかを学習者自身が理解していることが大切になってくる。その上で、次の様な発問をした。

家族の「かげおくり」の中に、「言う」に関する言葉はいくつありますか。線を引きましょう。
【数】

文末表現に目を向けさせることを意図した発問である。「つぶやく」や「ぼつんと言った」などの違いを検討していくことで結果として気持ちに目を向けることになる。また、二つの「かげおくり」を比較する際にも「ふつてきました」の表現により着目することができた。

①「ちいちゃん」や「お兄ちゃん」にとっては、どんな「かげおくり」だったのでしょうか。
「○○(な)かげおくり」と題をつける、どうなるかな。
②「お父さん」「お母さん」にあっては、どんな「かげおくり」だったでしょう。
【題をつける】

①は、「楽しい・うれしい」が大勢を占めた。理由を問うと「すごい」「二人とも感動しているように言っているから」との会話に着目して考えを述べていた。一方、②の両親に対しては、「切ない・つらい・やるせない・悲しい」などの意見が出された。交流では、「記念写真」と言っているから、大切な思い出として取っておきたいと考えている。「体の弱いお父さんまで」という言葉とつなげると、お母さんのつらさが分かる。という考えが出された。理由を説明する中で自然と会話や行動、文章表現に着目し、気持ちを想像する場面が多く見られた。この他、場面から想像できる「色」「音」を問うことも有効であった。今後も気持ちを直接問わずして読みを広げる発問を模索していきたい。

(竜王町立竜王小学校)

【引用・参考文献】
・吉永幸司(1992)『気持ち発問から文章検討発問へ』明治図書出版
・「教育科学国語教育五月号No.89」明治図書出版、pp.38-41谷口映介

話し合い どうすれば… 杉澤周一

沈滞してしまうグループの話し合いの対策について質問されることがある。拙者実践の覚え書きから次のような情報提供をしている。

話し合いには種類があり、どの話し合いかと進め方や終わり方を教えてみてはどうか。後で全体へどのようにつないで発表するかも示すと、そこへ向かう展開に。何れも例。量や質を調整すること、どの学年にも応用可能。

○たくさん出し合う A 質問やテーマに合うことをどんどん発言して、皆で領けたら記録する。たくさん集めて後で全体で全部発表する。

○選出することや順番などを決定・決議(どれか一つに決める 2つ選ぶ 一番目二番目…) B

○正解・真実を当てる、探す C それぞれの選出候補、正解・真実について個々が考えた後、それらをA3用紙に書き並べてみる。次にそれぞれの理由・根拠、事実、利点などを出し合い、用紙にメモを書き足す。出尽くしたら、なるほどと納得できるかや質問・疑問を考える。

それらを出し合い皆で考え応答を出し合う。同様にメモ。他の候補が正解・真実ではない理由・根拠、事例も挙げる。個々がもう一度熟考した後、皆の納得の度合い(321◎○▲)の高いものを確認や多数決で一つを決定。次に全体で発表する理由・根拠、事例を3つ選ぶ。意見が分かれた場合、複数発表も可。

○問題解決 アイデア提案 D

BCとほぼ同様。最初に個々が方策・アイデアを考え出し合いA3用紙に書き並べる。この話し合いの場合は、それぞれの理由・根拠、事例、効果・期待できることやその度合い・利点などを出すように示唆。全体で発表したいものを問い、多くが納得しものを複数であっても選び、発表する。少数の思い・考えも必要に応じて、「○○という考えもありました。」と付け加えて発表してもよい。

○広め深め合う E

発問や課題、読み取り、感想などについて、一人目が出した後、同じ・似ている・付け足す人が話す。次に質問・疑問を出し、個々が考え探し皆で応答し合う。その後、次々他について。最後に個々が熟考吟味し、補足、修正、ふくらませる、けずる、

変えるなどをノートに書き足す。全体発表は、個々。当初に、反応、つなぐ話し方、質問・疑問の話しぶり、ノートの記述例をモデルを示し教える。

○討論 F

テーマについて、賛成・反対、どちらも・どちらでもないなどについて、グループで一つに決めるのか、個々が決めるために参考にするためか、全体討論の前に、まずグループでやってみるシミュレーションのかを教師が目的を明確して始める。目的によって先述のどれかか組み合わせかの話し合いになる。

すぐ後の全体でどのように発表するのか、それを生かすどのような話し合いになるのかによって、BCDFであってもEのように、個々が後で全体で話し合うために参考にする話し合い確かめ合いになる。必ず明示、共有したい。

他の人に考えを聞いて、自分に照らし、付け足したり変えたりすることが話し合いのよさであり学習であることや一人が話した後、反応の仕方について学年なりに新学期に指導、その後、継続したい。教えなげや。

ローマと話す・聞く・話し合う力も一日にしてならず、継続かな。(東近江市立能登川北小学校)

編集後記

▲九月例会(第四八六回)は、

STEM(STEAM)を活用しての研究会としました。弓削裕之さん(京都女子大附属小)からの「うれしいことば(2年)」の実践報告を出席者が協議し、参加の同人はライブ視聴します。初の試みで十分には当初の目的を達成することはできませんでしたが、新型コロナウイルス感染症状況に対応しての工夫の一つとして試みました。▼弓削さんは、「人間力を育てる国語科授業づくり」の基盤には、「『学級経営』と『教室づくり』がある」という理解のもと、「どのような子どもを育てようとするのか」という願いを授業の目標、①知識・技能②思考・判断・表現力、そして③学びに向かう力・人間性の三観点に具体化しています。▼一時間分の授業記録は十ページ超、板書記録・全児童の振り返りの文章も提供していただきました。おかげで子どもが実際に取り上げて協議を深めることができたと思います。

▼十一月十九日『第八回近江国語実践研究会(彦根会場)』では、「私のめざす新しい国語学習」のテーマで川端大介さん(守山市立立入が丘小)の「くじらぐも(1年)」と、川部長人さん(東近江市立能登川南小)の「注文の多い料理店(5年)」の実践提案を巡って互いに深め合い学び合いたいと思っています。(申し込み11月9日まで)実践者の皆さんのご参加をお待ちしています。

▼巻頭には、西勝巳先生から玉稿をいただきました。深謝申し上げます。(森 邦博)